令和五年六月一日発行　毎月一回一日発行

書道研究誌

書の光

6
2023

Vol.658

宮城野書道会

漢詩を味わう

第167回

題鶴林寺　李渉

終日昏昏醉夢間　終日　昏々たり醉夢の間
忽聞春盡強登山　忽ち春の尽くるを聞きて強いて山に登る
因過竹院逢僧話　竹院を過ぎるに因りて僧に逢って話り
又得浮生半日閑　又た浮生半日の閑を得たり

ひねもす酒に酔ったようにうつらうつらと夢心地に過ごしていたが、
ふと春がもうおしまいだと聞きつけ、移り行く季節を惜しみ、
強いて気分をひきたてて山に登ってみた。
竹林の中の書院を通り過ぎようとして、僧侶に出逢って語り合い、
この儚い人生の中において、いささか長閑な半日を過ごすことができた。

《鶴林寺》　現在の江蘇省鎮江の黄鶴山に在った寺で元の名は竹林寺。
《昏　々》　暗いさま。
《忽　ち》　もうすぐ。にわかに。
《強いて》　むりに。気分を引き立てて。
《浮　生》　不安定な儚い人生。

李渉（八〇六―八二〇）は晩唐の詩人で洛陽（現・河南省洛陽）の人です。はじめ弟の李渤とともに廬山に隠棲して白鹿を飼っていたと伝えられますが、憲宗の時代に太子通事舎人となりました。清谿子と号しました。「醉夢の間」は俗事に追われて、無自覚の中に人生を無意味に過ごすことをいいます。こんな生き方は「醉生夢死」とも表現されます。「忽聞」はふと耳にすることですが、「春が尽きる」とは旧暦の三月末日で翌四月一日は旧暦では夏に属することから、作者は誰からか今日の暦を聞いて、醉夢のような日々を送っていましたが、思い直して最後の春山に登ったのでしょう。

そして竹林のなかで、僧侶と出逢って話をします。「あう」は「合う・会う・遭う」など様々な書き方がありますが、それぞれ本来の意味が異なります。「逢う」は説文解字では「遇う」に通じ、神異なもの（不思議なもの）にあうことといいます。李渉は僧侶と偶然に出くわし、儚い人生を送る中で、半日のんびりと過ごすことができたことを歓びます。僧侶とどのような話をしたのか気になりますが、重い腰をあげて春山に登ったことにより、僧侶と巡り合いいいひと時を過ごしたのです。「浮生」は李白の『春夜宴桃李園序』で「浮生は夢の若し　歓を為すこと幾何ぞ」とあります。また南唐の天子李煜は『烏夜啼』のなかで「算え来たれば夢裏の浮生」と詠んでいます。

宋の蘇軾は翰林学士だったころ、仏印という僧侶を訪ねてこの李渉詩を口ずさんだところが、仏印は蘇軾をからかって「学士は半日を閑居せるも、老僧は半日を忙了す」（貴方は半日のんびりできたでしょうが、私は、貴方のお相手で、半日忙しくさせられましたわい）と答え、「相ともに一大笑を発し」たといいます。

参考文献：中国古典選「三体詩」（朝日新聞社）・漢詩の事典（大修館書店）

涼聲竹を度り風雨の如く　砕影窓を揺らして月松に在り

《大意》竹を吹きわたる風は雨かとも思われて涼しく、松に懸かる月は窓をてらし松影とともに砕け動く。（文徵明詩句）

順に処る故に累無く　徳を養う乃ち神に入る

《大意》ものごとは順序さえ正しく追って行けば災難がなく、善徳を修養するから神妙の境に入るのである。（嵇康）

偶與前山通

読み　偶（たまたま）、前山と通ずるを（たまたま前方の山と通じていた）

佐藤象雲書

一般部規定課題出品について

・規定課題は段級の区別なく、前頁掲載の五言句となります。
・初段以下の方に限り、前半二文字または後半三文字でも構いません。
・規定課題（楷書）の出品はひとり一点に限ります。

連月課題

王維詩
「藍田山の石門精舎」（前半）

落日山水好
　落日　山水好し
漾舟信歸風
　舟を漾わせて　歸風に信す
玩奇不覺遠
　奇を玩んで遠きを覺えず
因以緣源窮
　因りて以て源を緣ねて窮む
遙愛雲木秀
　遙かに雲木の秀でたるを愛し
初疑路不同
　初めは路の同じからざるかと疑う
安知清流轉
　安んぞ知らん　清流轉じて
偶與前山通
　偶々前山と通ずるを
捨舟理輕策
　舟を捨てて輕策を理む
果然愜所適
　果然として適する所に愜う
老僧四五人
　老僧　四五人
逍遙蔭松柏
　逍遙して松柏に蔭う

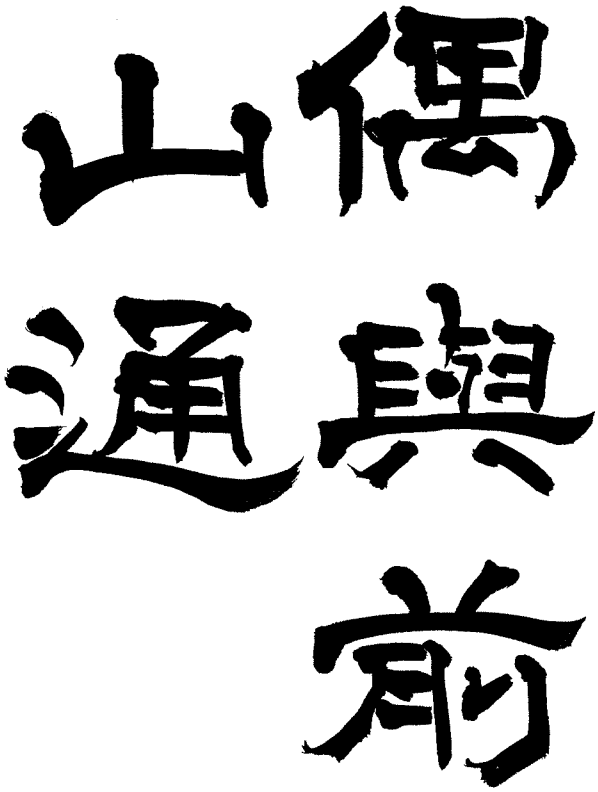
（後半に続く）

※成家・師範の随意作品出品は二点までです。

行書

草書

隷書



次号課題

舟を捨てて軽策（けいさく）を理（おさ）む

◇各体とも書風は自由です。特に上位者は古典などを参考に創意溢れる作品をご出品ください。

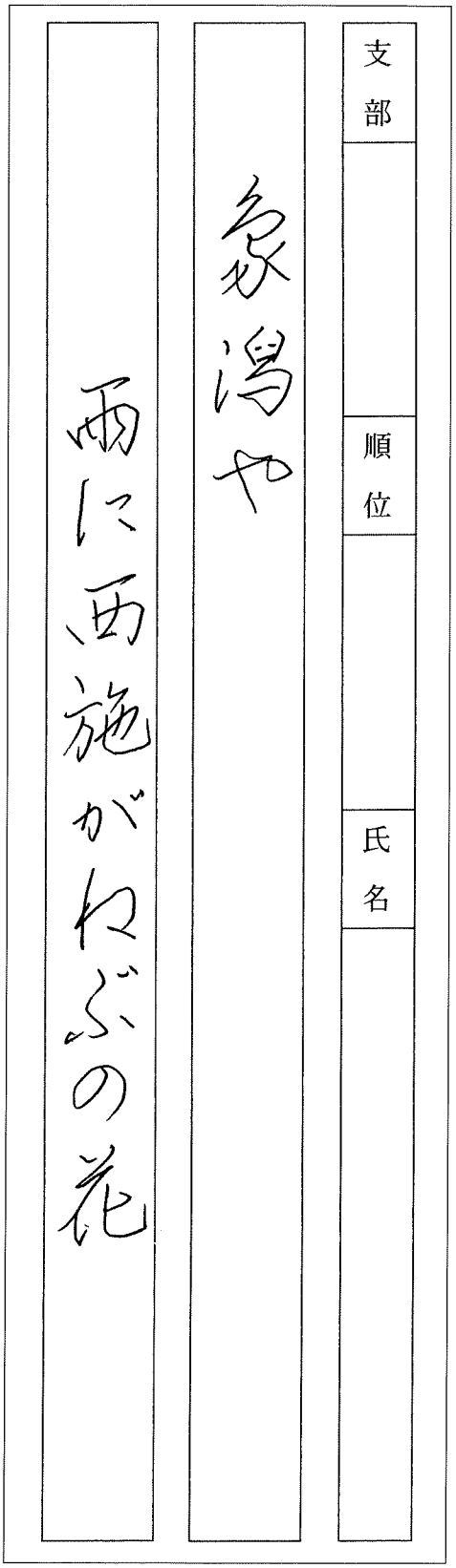
ペン字部課題　（6月30日〆切）　細字部課題　（6月30日〆切）

（両部とも本会所定の指定用紙を使用のこと）

佐藤象雲書

音　キョウシュトンソク　エツヨショコウ

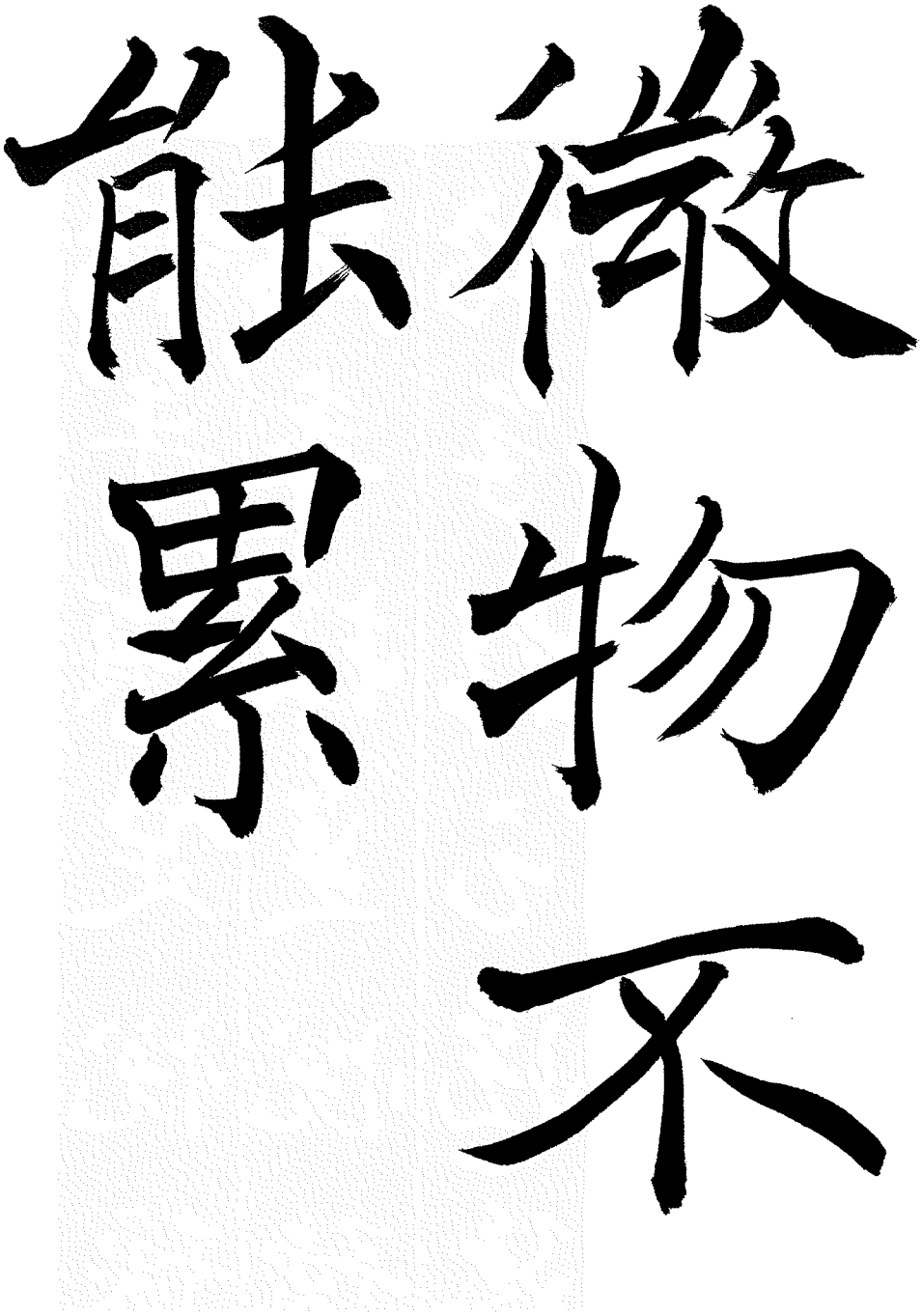
略解　手を挙げ足踏みして気ままに歓を尽くし心楽しく身は安らかに



芭蕉

和泉溪石先生書

微物不能累



微物は累すること能わず……

■褚遂良・雁塔聖教序（初唐・西暦六五三年）の臨書　(72)

象雲臨

『微物不能累』

今月の五文字は特に軽妙な細線で構成されています。元来、本碑は細線が主体ですが、「不」などの疎画の字は縦線や第四画などは太めです。碑の中で「不」は十二回登場し、「能」も七回も使われていますが、今回のこの二文字は特に細く感じられます。

「微」中央部をゆったりと書き、彳は幅を抑え、攵は小さめに中央部に寄り添うよう。

「物」勿の内部の右空間を広く。

「不」線は細いが、線にしなやかさを保つよう。

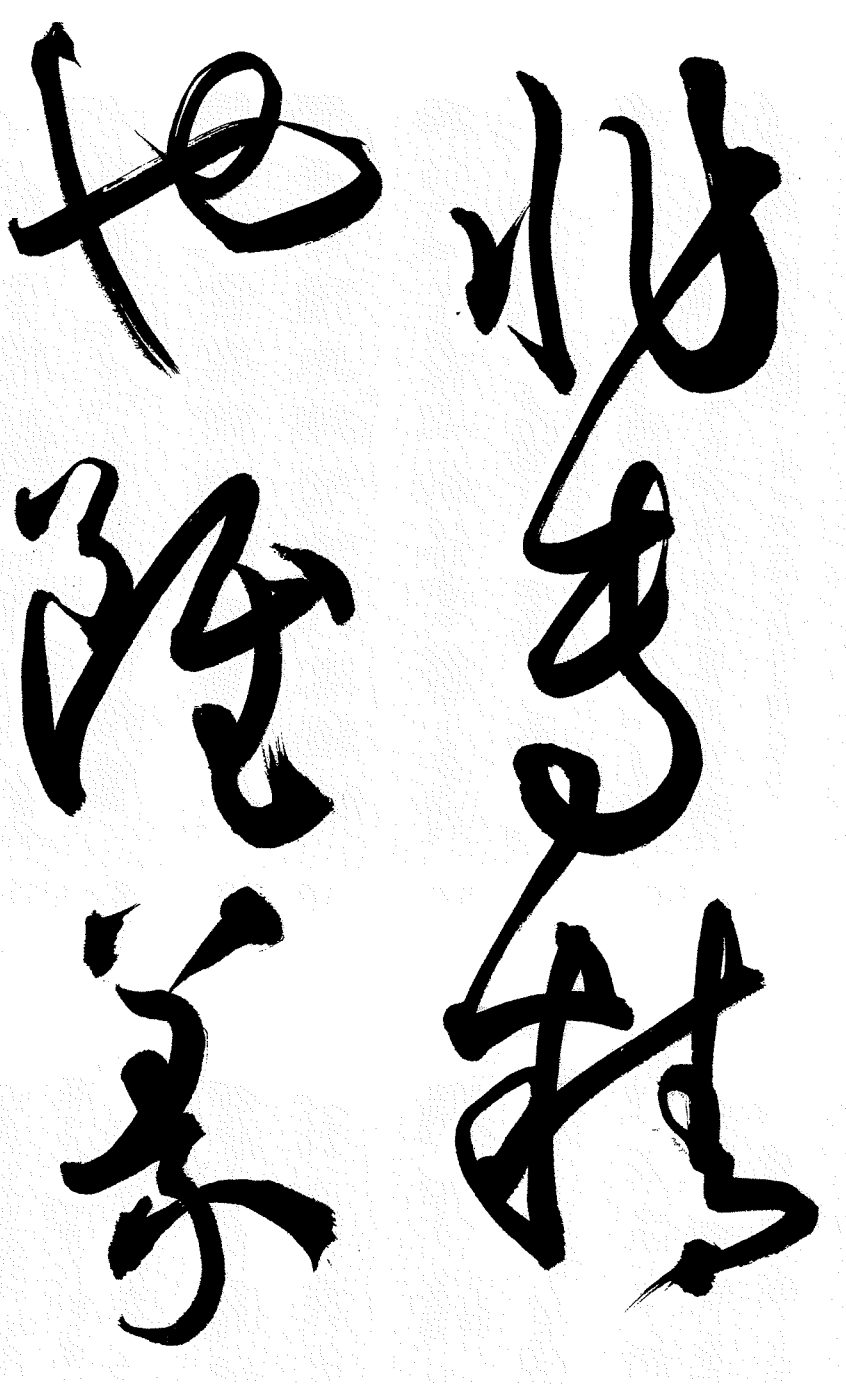
「能」偏上部のムは左に張り出し、旁の下部と対置させてバランスを保っている。

「累」上下同様に幅を持たせて、安定感がある。糸の上部の畳み込み方と、二点の位置が大切。

■孫過庭・書譜（初唐・西暦六八七年）の臨書

(53)

精を専らにするに非ざればなり。篆…と雖も…



象雲臨

『非専精也雖篆』

書譜は三六九行、三七〇〇字を超える字数からなり、その中で二～三字連綿の文字は多く見受けられます。一方で四文字連綿は稀で、通観してみると今回とこの行の十一行後の「時而書有」だけのようです。しかし、帖全体にわたって気脈の繋がりで連綿と同様の効果を発揮していますので、連綿線の有無はさほど重要なことではありません。逆に言えば連綿を使わずに気脈を一貫させることのほうが臨書においてさえも難しいようです。

今回の連綿四文字は細線で筆先が破綻することなく最後まで明快です。「也」の右側の線の切れは料紙の折り目に起因するものです。続く「雖篆」は新たに含墨してふくよかな線でゆったりと書かれています。